



母国で命の危険を感じて、日本に逃れてきたリヴィさんは日本に来ておよそ19年。「難民として認めてほしい」と話します=7日、神奈川県鎌倉市



子どもたちといっしょに農作業をするミャンマー人とインドネシア人の女性。手前の人=16日、神奈川県鎌倉市



6月20日の「世界難民の日」には、オンラインライブを開催しました=アルペなんみんセンター提供

母国逃れてきた人、日本にも

難民認定求める人が暮らすアルペなんみんセンター(神奈川県)

「難民」と聞くと、どんな人が頭に浮かびますか。遠い国で、難民キャンプに暮らす人々を思い浮かべる人も多いかもしれません。でも日本にも難民はたくさんいます。神奈川県鎌倉市の「アルペなんみんセンター」は、日本に難民認定申請中の外国人が暮らすシェルターです。(近藤理恵)

命の危険を感じ来日、働けず厳しい生活

アルペなんみんセンターは鎌倉の小高い丘の上にあります。キリスト教の修道院だった場所を借りて、去年4月に開設しました。個室は30あり、現在はミャンマー人やコンゴ人など11人が暮らしています。小さい子どももいます。全員が難民認定を申請中です。

難民認定申請中の人の中には、在留資格がないため、働くことができない人が多くいます。支援者から援助を受ける人もいますが、厳しい生活をせまられます。

センターは、こうした人たちに住む場所や食事を提供するだけでなく、日本での暮らしが安定するように、日本語を学ぶ機会もつくっています。

去年10月に入所したスリランカ人男性のリヴィさん(仮名)は、母国で大臣の警護について

命の危険を感じ、02年に来日。難民認定を申請していますが、今も認められていません。在留資格がなく、働くことができないため、センターに来る直前は住むところも失いかけていました。「電気もガスもつかず、食べ物もない日もあった」とふり返ります。

センターに来て約1年。「みんながいるので安心する」と言います。しかし今も銃撃された時のことを思い出すなど、精神的に不安定な日々が続きます。「隣にいた友人は死んでしまった。そのことを思い出して寝られない日もあります」

地域の人と活発に交流／難民の問題を身近に感じて

センターは、難民への理解を深めてもらうと、地域住民との交流も活発に行っています。難民に関する勉強会やオンラインライブなどを開いています。

リヴィさんも、ボランティアや地域の人に、本場のスリランカ紅茶をいれているそうです。「紅茶を飲んで笑顔になってくれるとうれしい」とリヴィさん。

小中学生とも交流を深めています。敷地内の畑で、月2回、センターの近くにある学童の子どもや中学生が入所者といっしょに農作業をしています。

16日は入所者のミャンマー人女性Aさんと、インドネシア人女性Bさんそして小学生4人、中学生3人が参加し、サツマイモの収穫などをしました。

Aさんは「子どもたちと話すですつと楽しく」と声をはずませます。「農作業をするのが自然な会話が生まれるのがいいですね。街で、子どもたちが私の名前を呼んでくれることがあります。あいさつをしてくれる人がいることは、うれしいです」

5年生の永倉皓哉さんも「AさんやBさんとは友だちです。『難民』というわくに入らずに、AさんやBさん、その人」として付き合っていきたいです。

センターの地域連携コーディネーターの漆原比呂志さんは「難民の人と交流して、親しくなれば、難民の問題は決して遠い国の話ではないと感じてもらえると思う」と言います。